

北原武夫の「ジャワ徴用」体験

—— 薔薇 を 描 く こ と ——

木村 一信

足かけ五か月にわたる「蘭印」旅行から帰った高見順が、「文化の傍さ」（初出、『都新聞』、一九四一・五・二七〜二九。原題は、「蘭印から帰つて」）に始まる（文学非力説）に関わる評論を公にした時期は、日本が、いまから振り返れば無謀、暴挙としか言えない戦争へと踏み出す半年ほど前である。

第二次近衛文麿内閣が発足した一九四〇年八月に、「内外の新情勢に対応するため」の「基本国策要綱」が発表されるが、そこには「皇国の国是は八紘を一字とする鑿国の大精神」とか、「大東亜の新秩序」といった明らかに領土の拡大と侵略の意思を含んだ方針が盛りこまれていた。この内閣の外務大臣に就いた松岡洋右が、外相就任直後の記者会見において、「基本国策要綱」を受け、「大東亜共栄圏」という言葉でもってその意思を国民にアツピールする形をとったことはよく知られている。

この後のわが国の新たな戦争の開始へと進んでいく過程は、猪突猛進と形容するのがびつたりと思えるようなあわただしさと暴虐さなどが感じられる。前年の二つの項目も含めて、アジア太平洋

戦争がはじめられるまでの準備とみなせる事項を列記してみよう。

- (1) 大本営政府連絡会議、武力行使を含む南進政策を決定（一九四〇・七・二七）
 - (2) 日蘭会商（第二次）開始（同・九・一三〜四一・六・一七）
 - (3) 北部仏印へ武力進出（四一・九・二三）
 - (4) 日独伊三国同盟調印（同・九・二七）
 - (5) 日ソ中立条約調印（同・四・一三）
 - (6) 「帝国国策遂行要領」を決定（同・九・六）
 - (7) 「御前会議」にて、対米英蘭開戦を決定（同・一一・一一）
 - (8) アジア太平洋戦争、開戦（同・一二・八）
- 「大東亜共栄圏」の語が、スローガンのうちにあげられてから一年数か月しか、この間、経過していないことにあらためて驚かされるであろう。この言葉が、アジア太平洋戦争への布石的な役割をになつていたことが理解される。

こうした情勢のまっ只中に、高見の〈文学非力説〉の言説は登場して来る。「ジャワ」へ行き、自分の期待していた「南洋」はそこにはなく、失望をもって帰ってこざるをえなかった。それは、「根本は、そこには文化が無かった」からであり、「生活のなかに生きてゐる文化の生命が私たちの生命と触れ合つて生ずる何か生命的なもの、それをその土地は全く缺いてゐた」(「文化の儂さ」と言う。果して、高見が滞在したジャワやバリ島に文化が無かったのかどうか、一概に高見の言葉には従えないが、「私は、文化を守るためには文化の土台を守らねばならぬと、今更ながら心に誓ふことを得た」と記していることは、植民地の現実を見聞してきた高見の実感であつたかと理解できる。そして、自分の従事している文学が、文化の土台を守るその力において、非力な儂いものではないかと思つたという、その感覚も首肯できよう。

ところが、前述したような「武力進出」を前面に押し立てた当時の日本の状況を反映する文化・思想・文学界は、しばらくその場を離れていた高見にとつては異に映つた。つまり、「帰つてから、留守中溜つた山のやうな雑誌を、まだよく落ち着いてない氣持でバラバラめくると、なんだかひどく景氣のいい文学論の抬頭が感じられ、「やや誇張するなら、文学が大砲や飛行機と堂々と肩をならべられるほどの力を持つてでもゐるかのやうな、強氣の、まあそんな氣焔が感じられ」たという。続いて、次のように主張する。

……文学をさう景氣よく扱ふのには私は目下のところ賛成

できない氣持である。文学はやはり非力なものだとする卑屈でなく謙遜な、逃避でなく素朴な文学者の心に与したい。

こうした高見の意見に対してはつきりと否という見方が提示されるのは、「文化の儂さ」に続いて発表された「文学非力説」(『新潮』一九四一・七)が世に出てからである。タイトルが目をひいたからかも知れないが、内容的には「文化の儂さ」と同趣旨の文章と言つてよいものである。「文学者は、自己の従事してゐる文学に於ける偉大なるもの小ささを知らねばならぬ。私が文学は非力だと言ふのは、文学を輕蔑しての言葉ではない。(中略)文学に於ける偉大なるものを十分承知しながら、その小ささを感じてゐたいのである」との「文学非力説」の中の意見も、すでに「文化の儂さ」中に記されていた。ただ、長谷健の「作家生活への反省」(『文芸春秋』一九四一・六)を取りあげ、批判を加えたところなどは新しい。高見の長谷文への反論は、きわめて妥当なものと言える。しかしながら、尾崎士郎は「決意について」(『都新聞』一九四一・八・六〇八)において、痛烈に高見の文章を非難する。詳述は避けるが、「文学無力説の由来するところは、むしろ便乗しきれない弱さ(もしくは強さ)の中に落ちつき場所を求めようとしてゐるのではあるまいか」と。

「非力」を「無力」ととり違えている点や、「便乗」が必ずしもマイナスのイメージを伴う語として使われていないところなど、今日からみて興味を覚えざるをえないが、尾崎のような時代・社会の風潮に氣ぜわしく適応し、そのお先棒をかつぐやうな言

説は、いつの世にも絶えないものである。が、この尾崎の言が引き金の役目を果たし、世にいう（文学非力説論争）がおこった。当事者同士のやりとりや幾人かの発言も加わり、応酬が重なるにつれ問題点も他の多くの論争の例にもれず、微妙に違い違っていた。高見の「現状への直言」（『文芸』一九四一・一一）をもつて論争は一応の決着をつけた形にはなつたが、そこでは高見の及び腰的な意見が目立つたと言えるであらう。奥出健が指摘するように、「文学非力説」を中心とした一連の発言が高見の「身を危くするようなしるものであつた」ことは確かであつたのだが。

* * *

（文学非力説論争）は、その主張の可否は別として、形勢は高見の側が劣勢であつたと言えるが、高見を支持する側にまわつた一人に、『都新聞』に文芸時評を書いていた北原武夫がいる。北原は長谷健の述べた、「一よりよき生活からのみよりよき文学は生れる」との考え方は、「作家と実生活についての、創作心理上の一種の倒錯」として退け、高見の加えた反論を肯定する。ただし、「作家にとつての実生活は文筆生活のことだ」という高見の言い方は「誤解されやすい」として、作家にとつては「小説を書く」ということ、そのことが実生活ではないのか」と正す。さらに、「他は一切空であり、彼にとつて信ずるに足るのは、ただ彼の割り出した小説の世界ではないのか」と述べている。ことわるまでもないが、ここに言う「彼」とは作家を指す。

こうした北原の姿勢は、戦争という現実の生々しい場に引きず

り出されようとした一九四一年の一月下旬の文章においてより明確にされる。「徴用を知つてから兵営生活に入るまでの間に執筆されたもの」と土屋忍の「推定」する「芸術に携はる者の覚悟」（初出は、『都新聞』一九四一・一一・二五〜二八）には、「学問芸術の徒」は「仕事の目的や意義を、現代の情勢にのみ膠着させて考ふべきではあるまい」との表現がみられる。土屋は、この北原の言葉などを引き、「戦争に対して芸術の実利を提示することで学問芸術と政治行動とを一致させようとした当時の文化人一般の思想を『甘つたるい』と言つて退けた」と意味づけている。

書齋では小説や評論の筆をとり、実業において、妻の宇野千代と共に女性を読者層とした雑誌『スタイル』の編集・発行に携つていた北原は、一九四一年一月、陸軍報道班員（宣伝班）としての「徴用」を受ける。宇野は、この折のことを回想して、一軍国調の圧力に、体ごと征服された」と表現している。一人の国民としての生き方と一芸術家としてのそれとを截然と切り分け、自分に与えられた現実を運命としてひき受けていた北原に、未知の世界での試験がやってくる。日頃の文学上の北原の信条は、「徴用」によるジャワでの宣伝班活動という、かつて予想もしなかつたような事態のもとでのような変化をみせるのであろうか。あるいは、変化ならぬ動揺もしくはさらなる深化がもたらされるのか。ジャワでの北原の体験の様相を追つてみることにしよう。

* * *

一九四二年一月二日、「徴用」を受けたジャワ派遣組の文化人

たちは東京の品川駅から軍用列車に乗りこんだ。真珠湾の攻撃、開戦という出来事から一か月もまだ経っていない時期である。生還できるかどうか、北原のみならず、大木惇夫、阿部知二、武田麟太郎ら、その他の作家・詩人仲間共々の思いであつたらう。大阪の天保山港からマニラ丸に乗船し、瀬戸内海を通つて台湾の基隆港へと向う。基隆から台北を経、高雄へと汽車で移動。町田敏二宣伝班長に率られた約百五〇人からなる南方軍・第一六軍「治部隊」宣伝班は、高雄商業学校の武道場を中心としてこの地で一か月近くを過ごす。五〇数隻で編成される船団の船が集結するのを待つためであつた。

姫路文学館に遺族より寄贈され、保存されている当時の阿部知二の家族宛書簡を繙くと、宣伝班内の生活ぶり、阿部の感情などがうかがわれる。同年一月二六日消印の妻澄子宛、高雄からの阿部の葉書には、

北遠き我家の庭に子らは群れ

白き粉雪吹き散るらむか

との短歌が記されており、厳冬を迎えている日本の家族の様子を思いやる文章が綴られている。もとより、軍の検閲があつて思うさまの事柄は書けないにしても、阿部書簡には必ず帰るとの文字が幾度か記される。これは、蘭印軍の降伏後、日本軍の統治地となつたジャワからの手紙においても同様である。それだけ、家族らの第一の心掛かりが無事に帰国できるかどうかであり、また阿部らの文化人たちにしてもそのことについての安心感を家族たち

に与えることが書簡の最たる目的であつたはずだ。

三月一日未明のジャワ島上陸作戦では、軍司令官今村均の乗つた船や宣伝班の主力メンバーの多くいた船が敵の魚雷を受けて擱坐もしくは沈没する事態が起つた。報道班員の中からは戦死者も出たし、海の中を数時間にわたつて漂流するという体験をする者もいた。幸い、北原の乗つた船は沈没することなく、上陸用舟艇を用いて画家(漫画家)の小野佐世男と共に西ジャワ・バンタム湾に面した岸边から上陸していく。

さて、当初三か月は要すると目されていた「ジャワ攻略作戦」は、予想外に九日間という短時間でもつて蘭印軍が無条件降伏をした。従つて、宣伝班に属していた北原は、いわゆる「パタピア沖海戦」は経験したし、『ジャワ従軍記 雨期来る』(一九四三・九、文体社刊)や「バンテン湾」(『読売報知新聞』同・二・九、一四)において詳述しているように、「何とも言へない戦いの恐怖」を味わつたが、陸上においては戦闘を身近かに体験することはなかった。

バンドンにて降伏調印式が行われた翌日、すなわち三月一〇日に北原は音楽家の飯田信夫や漫画家の横山隆一らと共にパタピア入りをする。それから帰国の途につく一九四一年の一月中旬までの九か月余りが北原にとつてのジャワ体験と言えるであろう。

この間の北原の宣伝班における仕事を列記すれば次のようになる。まず北原は、「映画の検閲」に携わる。一日に、アメリカの制作になる文化・漫画・劇といった各映画を四、五本から七、八

本検閲した。また、日本語普及の仕事にも関わり、インドネシア語版の新聞『アジア・ラヤ』に「日本語読本」を書く。これは、浅野晃らが明らかにしているように、日本の少年の生活を紹介したり、勇士のお話をやさしい言葉を用いて（ただし、ローマ字）述べたものである。現在、ジャカルタ市にある国立図書館にこの新聞は收藏されているが北原の執筆になる文章は未見である。さらに北原は、ジャワ各地をまわり、従軍記執筆といった仕事にも手をそめる。宣伝班の編集になる陣中新聞『赤道報』（のちに、『うなばら』と改題される）や日本の新聞、雑誌などにジャワの風俗や気候、人々の暮らしを書いて発表したりもする。

しかしながら、こうしたいわば「文化工作」の仕事に北原は強い疑問を抱く。たとえば、劇映画を検閲し、「敵性的な宣伝の個所や風俗上いかがわしいところ」などをチェックするわけだが、すぐれた映画であればあるほど芸術性に観点をおいて捉えてしまいい、単純に「敵性的」とか「風俗上いかがわしい」との判断が下せない。ましてや、自分は映画製作や鑑賞・批評を専門とする者ではないので評価の基準がわからない。もしも、映画ではなく音楽において同様の業務についたとしたらお手あげではないか、と思う。日本語普及活動においても同様である。小説家・批評家としての自分は言葉への関心はなみなみならぬものがあると自負するが、占領地で行われる日本語普及活動に自分が定見らしきものを持つことができると思えない。

おそらく、少数の例外者を除いて、「徴用」を受けて統治・占

北原武夫の「ジャワ徴用」体験

領地での文化工作にあった文化人たちの多くは強弱の差はあれ同様の感想を抱いたことであろう。阿部知二に、「レット・ルース——みな、やるだけのことはやっている」（『文学界』一九五五・九、文芸春秋社）と題した文章がある。「戦火と作家達」という特集に応じて書かれたものであるが、占領地ジャワにおける文学者たちの「協力非協力」のさまを具体的かつ詳細に記している。「結局、この宣伝部隊は、悲劇というよりは喜劇——一個のファーストではなかつたらうか」との言葉もみられる。

しかし、一つの感嘆すべきことがある。じつさい、いつか北原武夫が「みな、やるだけのことはやっている。えらいものだ」と嘆声を発したのを忘れるべきではなからう。というのは、それぞれのものが、その本性に従って、善にあれば悪にあれば、あらゆるところに出没し、あらゆることをしたのである。（中略）……おのれの為すべきことはしたのである。しかも、それがすべて徒手空拳をもってなされたというところに、文士の面目があつた……。

「徴用」時代の自らをふり返って、一種の苦さ、悔恨に近い気持ちとそれなりに真剣であった当時を懐しむ心情の交錯を思わせる文章である。が、本音とも言うべき事柄が語られていよう。

置かれた場、与えられた仕事への違和感と新たに体験した異国の地での生活、異文化、異民族に対する関心や興味、好奇心などが、阿部や北原といった「良心」的な作家たちに共通してみうけられる特徴である。

北原のジャワ体験を題材にした二、三の文章をとりあげ、その特徴の内実をいま少し考えてみることにしよう。

* * *

北原の単行本『雨期来る』は、「ジャワ従軍記」とある通り、全篇が「徴用」体験についての記述で占められている。この中で、「ジャワ旅行日誌」と副題の付された、書名にもとられている「雨期来る」の章は読者にとって印象の深い文章となっている。ジャワ島を自動車を使って一人で回り（と言つても、運転手はずつとつきそっているが）、ジャワ島の案内記を書く仕事を隊長（町田敬二）から命じられたというのである。ジャカルタから東部ジャワの高原都市マランへと走り（約八〇〇〜九〇〇キロの距離）、そこからスラバヤ、ソロ、ジョクジャカルタというようにジャワ島を東から西へと戻りながら横断してくるといった行程である。

単行本を上梓した折の「あとがき」には、「その殆んど大半がジャワの気候風土に関して書かれてゐる」ことに、北原自身、驚きを感じた旨が記されている。その「気候風土」を描いて最たる箇所が、「メラピ」火山への感嘆を洩らす場面であろう。これまでに噴煙をあげる「生き」た火山を見たことのないという北原は、目のあたりにした「メラピ」山に「生れてはじめての自然の壮大さ」に打ちのめされた思いを抱く。車を止め、「きつちり二十分ぐらゐの間」、「豪岩で雄大」な景観に見入る。

北原の視線にそつてを付度を加えてみるならば、ソロからジョクジャカルタへの街道は、ジャワ全島の中でもその美しさは随一

といつていいほどの見ごたえのある場所であろう。田植えと稲刈りとが隣り同士でおこなわれている田園風景、椰子の木々の集まるその下に散在する集落とその家々、さらに三千メートル級の高さのメラピ山（北原はメラピと表記している）とムルバブ山の重なりあうさまなど、北原ならずともこうした景観に魅せられる人は多いはずである。

しかしながら、北原の書き記す感動はやや大仰なと感じられるほどのものがある。なぜか。この風景を目にする前日、北原は日本の奈良に比せられるソロ（スラカルタ）の町に滞在していた。ソロでの夜、「胡弓や笛らしい音に銅鑼のやうな音の混ざつた「侘しい音色」が耳に届く。北原は、感情をあらわにした表現を選んでいる。すなわち、「……僕は、堪へてゐたが、その時、不意に自分の眼をつぶつてしまひたいほどのほげしい寂しさに襲はれた」と。『雨期来る』をはじめとするジャワでの生活を叙した北原の文章には、しばしばここに記されているような「寂しさ」が点綴されている。この「寂しさ」のよつてきたるところを探るのは後まわしにするとして、ソロでのその反動が翌日の「メラピ」山の噴煙への感嘆につながっていると考えられよう。侘しき、寂しさに沈む心と、雄大さ、壮大さに心動かされる思いとが交互に北原を襲つていると考えたい。

『うなばら』紙に発表した「薔薇——家郷の友に寄す」（一九四二・四・一四）なる一文がある。たそがれのバタバアの街の叙景から始め、この国、街の風景、気候一般を論じたものである。

パタビアの夕暮れ時の美しさについては、早く金子光晴が『マレ—蘭印紀行』（一九四〇・一〇、山雅房）の中に書きとどめていたし、また戦後には、かつてこの地で軍隊生活を送った庄野英二の『絵具の空』（一九六二・一二、理論社）に青春の追憶をあわせて描き出した文章がある。

しかし、金子や庄野の描き方に比べて北原の場合は、実景というよりは心象風景に彩られた感が強い。街の空気は澄み、色鮮やかさに満ちているが、「何か一種云ひやうのない空しい明るさ」を帯びていると言う。それは、「伝統」や「精神的なもの」のない国土からくるのではないかと見、街をゆく亡国のオランダ女性を日本の女性と比べたりもする。「季節のない季節、いつも濁った運河、徒らに明るく空と徒らに色濃い樹木、そして伝統を葬った国土」と、北原はパタビアの街を解釈する。その折、部屋に飾られていた「明るく赤く咲いてゐる」数輪の薔薇が北原の目を射た。

ここで北原が述べようとしていることは、景色や風景の美しさは、単にそのみでは人の心を捉えないもので、その背景として目にみえないながらも伝統や文化に裏打ちされた国土という基盤があつてはじめて景観も生きてくる、ということであろう。しかし、その北原の思惑は中部ジャワの「メラビ」を目にした時に覆される。はじめて生きている火山を見たとか、比類のない雄大さであつたといった物理的などころからくるのではなく、明らかに文化の積み重ねによって作られたジャワ中原の道、すなわち大き

く成長した木々が道の両側をおおい、自動車がフルスピードで疾駆しうる道、そして二つの古都をつなぐその道のあちこちには、仏教やヒンズー教信仰から建造された遺跡の数々が点在する、そうした地盤の上に聳え立つ山が「メラビ」なのである。実は、ソロの街で「恠し」く耳にした音色でさえ、「メラビ」を象徴とするジャワの文化の一端を成すものであるはずだ。北原の心象に訴えかけてきたものが強かつた分、それだけ深さを有している証左とも言えるであろう。

パタビアの宿舎で目にした薔薇の花は、日本に帰つた後も北原の脳裡から消え去っていなかつた。一九四三年五月、『文芸』（改造社）に寄せた文芸時評は「薔薇について」と題されていたが、やはりジャワで目にした薔薇の花の回想から始められている。「八月頃のことだ」と記されていることから、『うなばら』紙に紹介された薔薇の花とは時期的に少しずれる。が、やはり宿舎の卓上のその花を眺めていて、ある啓示にとらえられる。それは「名状し難い一種異様な強いはげしさ」を伴う想念でもあつたという。

……僕は思はずそれを自分の口に出して、一人でつぶやいたものだ。僕は、言ひ難い確信で、身体が疼くやうな気がした。——全くだ、冗談ぢやない。一輪の薔薇の美しさを描くことは男子一生の仕事に足るのだ、と。

磯田光一は、この「薔薇について」に言及して、ここで北原は「文学表現の世界もまた自己完結性をもつたものであることを述べ、現実から文学表現の自律性を鋭く分離した」と評している。

また、この見方は高見の（文学非力説）の観点をいつそう「純化」したものだとも述べている。ほぼ当を得た評辞と言えるであろう。が、この見方を手にするまでの北原には、（文学非力説論争）に口をはさんだ頃そのままではなく、「徴用」体験という強いられたものではあつたが彼の文学にとつて意味をもつた時間が経過していたのである。

バタバアの街の色に「明るい空しさ」を見てとり、ソロで耳にした音色に「侘しさ」を感じた北原は、アイデンティティの在りどころを摸索している感がある。長年にわたつて植民地とされてきた国民の存在根拠（自己同一性）はどこにあるのかとの思いが北原の心を占めている。と同時にそれは文学に携わり、芸術と実生活、作家と生活とに關して自分なりの見識を、持っていると思ひ續けてきていた自己を揺ぶる問題意識でもあつた。

ジャワの自然や風土に触れ、オランダによる植民地、そして日本軍による統治地としての国土に思いをいたす時、北原は本當に自分にとつての文学の在り方を問ひ直す。当時、東条英機が「いまは薔薇を作る秋ではない」と語つたとのエピソードがある小説中に紹介されている。その真偽のほどは未だ確かめえていないが、そうした時勢であつたことは間違いない。男子一生の仕事として一輪の薔薇の美しさを描くこと、このように宣言した北原には、現実としっかりと対峙しつつ自らの世界（芸術）を打ち立てる自負と自信とを手にしたと言えるであろう。しかしながら、それを手にするためにはある種の断念あるいは悲しみを味わうといつた

引き換え条件が必要とされなければならなかつた。その様相を語るのが、二度にわたり改稿の手が加えられる「カリオランの薔薇」（初出は、『うなばら』一九四二・九・二〇）であるが、紙幅が尽きた。戦後のほとんど改作と言える同作品の分析と共に稿をあらためて論じることとしたい。ジャワでの「徴用」体験を経ることと、北原の文学を見る目や考えはいつそうの深化をみせたことは間違いないであろう。

注

- (1) 「高見順（文学非力説）を續つて」（『国文学研究資料館紀要』第九号、一九八四年三月）
- (2) 「作家と生活」（『都新聞』一九四一年六月二八日〜七月二日）
- (3) 「北原武夫とジャワの薔薇」（神谷忠孝・木村一信篇『南方徴用作家』所収、一九九六年三月、世界思想社）
- (4) 『生きて行く私』（一九九二年一月、中公文庫）
- (5) 「北原武夫」（『日本近代文学大事典』第一巻、一九七七年一月、講談社）
- (6) 小林信彦『ぼくたちの好きな戦争』（一九八六年五月、新潮社）（きむら・かずあき 本学教授）